『アジアのなかの日本史』（全六巻）の編集を終えて

荒野泰典

石井正敏・村井章介両氏と私の三人で編集した『アジアのなかの日本史』全六巻が、今年の四月に第六巻を出して完結しました。第一巻を出したのが昨年の五月、それからほぼ隔月刊のペースを守り、一一ヵ月かかってなんとかゴールインしたわけです。このシリーズの刊行をめざして、編集委員三人でフリートーキングにはいったのが一九八五年三月末のことでしたから、企画がスタートして完結するまでにほぼ八年かかったことになります。

このシリーズのねらいは、従来一国史的な観点からのみみられがちだった日本史を、アジアのひろがりのなかで再構成するということにありました。そのために設定した三本の柱が民族（エトノス）・地域・比較です。「民族」をあえて「エトノス」という文化人類学的な概念にしたのは、「日本民族」を天皇や民族国家観へのもたれかかりから解放するためです。日本列島上で歴史を刻んできたのは「日本民族」だけではなく、また、「日本民族」それ自体も、例えば、列島の東と西の議論にみられるように、かならずしも予定調和的に一つの民族であったわけではありません。日本人の形成それ自体が、洗いなおしの対象なのです。

「地域」は、私たちの歴史が展開してきた場を、国境や行政区画へのとらわれから解放するために設定しました。したがって、この「地域」は、地理学的に固定されたものではなく、問題のたて方によって自由に設定できる、いわば伸縮自在なものです。実際、私たちも、具体的な生活の場では、様々なレヴェルの「地域」と関わりながら生きているはずで、それは前近代社会においても同様だったはずです。「アジアのなかの日本史」の「アジア」は、私たちの歴史とその場との多様で重層的な関係性を探り、発見するためのキーワードなのです。

そして、その場との関係性を探るための手続きの一つが、「比較」です。これは、いうまでもないことですが、かつてのようにヨーロッパやアジアの特殊な事例を規範として、それとの優劣や遅れ具合などを問題にするのではなく、普遍史、あるいは人類史へ近づくために踏むべき段階

なのです。不用意に、または性急に「日本的特質」などといわずに、広く世界を、特にアジアをみわたしてそのうえで考えてみよう、というのが基本的なスタンスです。

フリートーキングをはじめた段階では、おおまかな方向は決まっていたものの、これら三つの柱を明確に意識していたわけではありませんでした。むしろ、現段階で欲しい論点や知りたいことなどを、夢に属することまでも、自由気ままに出しあい、話し合うということをつみかさねていくなかで、徐々に形を整えていったのでした。しかしこの企画が、単に、いわゆる学際的な研究を組織することではなく、日本史研究者の日本史研究者による、自己解体と再構成の試みなのだという点では、私たち編集者ははじめから一致していました。学際的な問題に私たち日本史研究者がどの程度接近し、学べるのかが、このシリーズの、隠れた、しかし明確なテーマでした。執筆者の偏りは、編集者の力量による場合もありますが、このテーマに規定されたためでもあります。

編集者三人にとってはそれが本になるということは、あまり現実性をおびたものではなく、当初からそれを見通してその方向にリードしてくれた東京大学出版会の編集担当者（高橋朋彦氏）がいなければ、あるいは、夢の話で終っていたかもしれません。しかし、企画が現実のものとなっていくなかで、私たちも編集者としてたしかな手ごたえを感じはじめたのでした。まず、執筆依頼への反応が非常に好意的であり、おそらく半分もひきうけてはもらえないだろうという予想はみごとに覆されました。寄せられた原稿にも、今までにない、あるエネルギーや力を感じつづけました。なんとかシリーズ完結にこぎつけられたのは、そのようなエネルギーや力の後押しがあったからかもしれません。

刊行前後の評判もなかなかで、第一巻は発売後二ヵ月で増刷され、他の巻もほぼ順調に売れゆきを伸ばしています。これで一応編集者としての責任は果せたことになりますが、それで満足しているかというとかならずしもそうではありません。今後に期するところも多いのですが、まずはともあれ読んでみていただき、この方向をさらに推進するためのエネルギーをいただきたいというのが、正直なところです。

（A5版、各三七〇八／三九一四円、東京大学出版会）

（立教大学教授）